第一部　災害の記憶［コメント］

災害の記憶を伝える文化装置

——保立道久氏、グレゴリー・ボサール氏へのコメント

島薗　進

一　古代の事例と近代の事例

保立道久氏とグレゴリー・ボサール氏は、ともに文書にまとめられるような合理的な知識を伝えるというのとは異なる仕方で、災害の記憶を伝える様式があったことを強調している。そして、そうした文化装置について学ぶことで、現代の私たちが何を得ることができるかを考えようとしている。

保立氏は八世紀から一二世紀に至る時期の日本の歴史において、地震がきわめて大きな文化的意味を担ったことを示している。地震は津波や火山噴火や雷とも結びつき、怖れられる神は大地の神であるとともに海の神という性格をもち、ひいては疫病神と結びつくこともあった。穢れは海や大地へ吸収され、巨大な力をなって災厄をもたらす。

神々や死者のいる向こう側の世界を招き寄せる道具として、琴（弦）が大きな役割を担ったことが知られて

いる。ところがその琴を鳴らすことが大地の震動と結びつけられもした。そして、こうした災厄神の偉大な力を信仰することは、祟る神を祭って幸を得ようとする御霊信仰とも縁が深いものであった。

地震やそれに連なる災厄神の系譜は、遡ればスサノオ、オオナムチ＝オオクニヌシ、厳島神社（沙羯羅竜王の第三の姫宮）、祇園神＝牛頭天王（沙羯羅竜王の娘を妻とした）といった神々に連なる。祇園御霊会などが災厄と関連することはよく知られていたが、それを地震等の自然災害と結びつけて考えることを、従来の歴史学は怠ってきたのではないか。保立氏は上記のような脈絡を追いながら、神話的な思考が地震・津波などを伝える文化装置としていかに大きな役割を担ったかを示していく。

七四三年には河内大地震が起こっているが、このとき高市皇子の王墓が崩壊した。聖武天皇と縁が深かったが、七二九年に自死に追い込まれた長屋王の怨霊がそれに関わっていると信じられたらしい。『華厳経』には「釈迦は地震を鎮める力をもつ」との記述があり、地震は大仏建立の大きな動因であったかもしれない。祇園社で祇園会が始められたのは、八六九年の陸奥大地震・大津波（貞観地震）と関わりがあるだろう。一二世紀の平家も祇園と厳島への信仰が篤かったが、その背後には龍神信仰の存在がうかがわれる。『方丈記』に記されている一一八五年の大地震、また若狭湾と推定される津波もこうした文脈で捉え返されるべきものだろう。

一方、ボサール氏は、一九世紀以降の大阪や堺と紀伊半島で起こった災害に関わる一三の碑を調査し、その特徴を明らかにしている。これらの中には死者たちの魂を鎮める機能をもったものと災害の記憶を伝えることに力点があるものがある。前者が儀礼的な意味をもつことは言うまでもない。災害の後、早い段階で死者たちの魂を鎮めるための儀礼が行われている。そしてほぼその直後に碑が建立されている。

後者は寺社の境内や公園に建てられており、教訓あるいは経験を伝えることを主眼としている。時期は災害後、数年以上経過しているものが多い。これは直接的に儀礼的な機能をもつわけではないが、そうした機能と

結びつくこともある。これらは小さな地域共同体の紐帯を基盤としているが、災害の経験は広い範囲の地域で共有されてるから、マクロな地域共同体の記憶に連なるものでもある。

さまざまな形態に共通のことだが、記憶の文化装置の形をとることによって、出来事の記憶を保存し、そうすることによって地域共同体を守ろうとする意志を伝え、将来の災害に備えるという機能をもつことになる。そこでは儀礼が大きな役割を果たし、知的な理解よりも身体的な次元で共有される記憶が優勢になる。当初は犠牲となった個々の死者の弔いに力点があったとしても、次第に死者の個性は失われ、共同体の共有する祖先や守護霊といった存在への崇敬に力点が移っていく。

二　神話的な力をもった記憶

保立氏とボサール氏の研究は、どちらも集合的な記憶が、分節化された知として伝えられていくのとは別に、神話的、儀礼的な形で伝えられていくことに注目している。しかし、同じく日本を対象としているとはいえ、保立氏の扱っている事例とボサール氏の扱っている事例では大きな相違がある。

保立氏が扱っている八世紀から一二世紀頃までの事例では、国の歴史に関わるような政治的現象と結びつく災害の記憶が多い。国家次元、あるいはそれに準ずるマクロな社会的広がりで共有される文化装置が取り上げられることになる。当時の大きな宗教的出来事が、災害と関わっていたことが注目されている。この時代にはなお社会全体の思考様式の中で、神話的思考の側面が大きな位置を占めており、そこでは災害の記憶が重要な位置を占めていた。ところが、近代の歴史はそうした側面を見逃してきたという。

日本の神々への信仰において、災害に関わるような側面が軽視されてきたという指摘は、宗教史的にもたい

へん重要なものだ。記紀神話で大きな役割を果たすスサノオやオオナムチが天地自然の大変動と、したがって大自然災害と関わるものとして信仰されてきたということは、従来、取り上げられることが少なかった。

他方、民俗宗教の研究という文脈では、龍神信仰や雷神信仰に関心が集まることはあった。それだけ影響力が大きいものだからだ。たとえば、山形県庄内地方鶴岡の曹洞宗善宝寺は龍神信仰の聖地としてよく知られていた。江戸時代以降、主に漁民の信仰として勢力を広げたものだろう。だが、それは宮廷周辺の国の中心で国家的な災害と結びつけて力をもつようなものではなかった。だが、保立氏の考察によれば、少なくとも一二世紀ぐらいまでの時期にあっては、災害や天体現象に関わる神が政治的な重大事と密接に関わるものと信じられていたということになる。

保立氏も強く意識しているが、こうした神話的思考は現代では力を失っている。他方で「安全神話」というような用語がしばしば用いられるように、弱さの現れであるようなものとして「神話」という語が使用される機会が増えている。では、保立氏が意義あるものとして見直しているような神話的な思考の力は、現代社会ではどのような形で蘇らせることができるのだろうか。そのままの形ということではないだろう。

一つは保立氏自身が行っているように、歴史研究を通して過去に働いていた神話的な思考法をあらためて思い起こし、それに学ぶということだろう。神話的思考が伝えようとしていた、人間が統御しきれない自然の予期せぬ巨大な力に対して、謙虚であるべきことを伝えていかなくてはならない。また、神話的思考を遠ざけることによって私たちが失ったものは何であるかを明確にしていくことも必要だろう。自然に対する謙虚さを失い、人間の統御力を過大に評価するような姿勢をもつようになってしまったことはその一つの仕方だろう。

今一つは、芸術や報道や学術などの中に神話的な想像力を盛り込んでいくということが考えられるだろう。たとえば、現代の映像文化はこの点できわめて大きな可能性をもっている。事実に基づく映像であれ、フィク

ションであれ、津波の恐ろしさを伝える映像はかつて想像もできなかったほどの迫真力をもって災害の恐ろしさを伝えるものとなっている。だが、多額の投資とともに行われる場合、被災者の経験からかけ離れたものともなりうるだろう。この点は、以下でさらに考えていきたい。

三　新たな共同性の形

ボサール氏が論じているように、慰霊碑、記念碑のような形で災害の記憶が伝えられてきたことが注目に値する。それは被災者たち自身が構成する地域社会の共同性が重要だということでもある。時が経つとともに地域社会の記憶は薄れていき、たとえば学校や行政やメディアを通して、疎遠な知識の形でかろうじて伝えられることになる。生活と密着した知が弱まっていき、それとともに地域社会での記憶や防災の意識も薄れていく。これに対して、一九世紀から二〇世紀の中ほどまでの人たちは、慰霊碑、記念碑を作るという形で対応しようとしていたことをボサール氏は示している。

東日本大震災の津波の被災地では、恐らく慰霊碑や記念碑も多数できているし、津波の記憶を伝える書物や施設なども今後さらに多く作られていくだろう。これは巨大な災害だったということが影響している。より小さな災害の記憶は今も残されにくいかもしれない。災害の深刻さを如実に知ったことにより、今後はこれまでより災害の記憶が伝えられやすくなるかもしれない。記憶の文化装置はさまざまに機能するだろう。

ここで重要なことは、地域社会の住民の経験の地平での記憶が伝えられていくことだろう。そのこと自身が地域社会の「人間の復興」につながる。東日本大震災では物財中心の復興の姿勢が目立っている。巨額の資金を投入して、地域の産業が発展することが、復興政策の中心と考えられる傾向である。巨大な防潮堤を作る計

画がどんどん進んでいるのはそのよい例だし、福島県の避難地域でひたすら帰還を急ぐ政策が進められるのももう一つの例だ。そのような「復興」は災害で大きく傷んだ地域の共同性をさらに破壊する方向に作用する。

「人間の復興」と結びつくような形で災害の記憶が伝えられることを願うときに、注視すべきは「ダークツーリズム」という発想が広がっていることだ。アウシュヴィッツとかチェルノブイリのような悲惨な記憶を伝える場所を、観光地として開発していくことに期待する声がある。だが、それは「外からの物財の復興」と結びつく可能性がある。被災した地域住民を置き去りにした「記憶」の組織化になる可能性をはらんでいる。

すでに、東浩紀他『福島第一原発観光地化計画』（ゲンロン、二〇一三年一一月）というような書物も刊行されている。長期的にはそのような事態が進展することは十分考えられ、それなりに記憶の文化装置として機能する可能性が考えられる。しかし、被災者の経験を置き去りにして経済的利益に優位を置いて進められる場合、それは「人間なき復興」（山下祐介他『人間なき復興』明石書店、二〇一三年）に力を貸すことになりかねない。

ボサール氏が示した過去の例は、住民が主体性をもって育てて来た災害の記憶の文化装置のよい例である。このような先例の意義をよく検討し、地域社会の、とりわけ被災者の主体性と共同性を尊ぶような方向で記憶の文化装置の形成が進むことが望ましいだろう。

（しまぞの・すすむ　上智大学特任教授、東京大学名誉教授）